

[B年] 聖霊降臨節第16主日(2026年9月6日)**【旧約聖書日課】列王記上 21章1～16節**

¹これらの出来事の後のことである。イズレエルの人ナボトは、イズレエルにぶどう畑を持っていた。畑はサマリアの王アハブの宮殿のそばにあった。²アハブはナボトに話を持ちかけた。「お前のぶどう畑を譲ってくれ。わたしの宮殿のすぐ隣にあるので、それをわたしの菜園にしたい。その代わり、お前にはもっと良いぶどう畑を与えよう。もし望むなら、それに相当する代金を銀で支払ってもよい。」³ナボトはアハブに、「先祖から伝わる嗣業の土地を譲ることなど、主にかけてわたしにはできません」と言った。⁴アハブは、イズレエルの人ナボトが、「先祖から伝わる嗣業の土地を譲ることはできない」と言ったその言葉に機嫌を損ね、腹を立てて宮殿に帰って行った。寝台に横たわった彼は顔を背け、食事も取らなかった。⁵妻のイゼベルが来て、「どうしてそんなに御機嫌が悪く、食事もなさらないのですか」と尋ねると、⁶彼は妻に語った。「イズレエルの人ナボトに、彼のぶどう畑をわたしに銀で買い取らせるか、あるいは望むなら代わりの畑と取り替えさせるか、いずれにしても譲ってくれと申し入れたが、畑は譲れないと言うのだ。」⁷妻のイゼベルは王に言った。「今イスラエルを支配しているのはあなたです。起きて食事をし、元氣を出してください。わたしがイズレエルの人ナボトのぶどう畑を手に入れてあげましょう。」

⁸イゼベルはアハブの名で手紙を書き、アハブの印を押して封をし、その手紙をナボトのいる町に住む長老と貴族に送った。⁹その手紙にはこう書かれていた。「断食を布告し、ナボトを民の最前列に座らせよ。¹⁰ならず者を二人彼に向かって座らせ、ナボトが神と王とを呪った、と証言させよ。こうしてナボトを引き出し、石で打ち殺せ。」¹¹その町の人々、その町に住む長老と貴族たちはイゼベルが命じたとおり、すなわち彼女が手紙で彼らに書き送ったとおりに行った。¹²彼らは断食を布告し、ナボトを民の最前列に座らせた。¹³ならず者も二人来てナボトに向かって座った。ならず者たちは民の前でナボトに対して証言し、「ナボトは神と王とを呪った」と言った。人々は彼を町の外に引き出し、石で打ち殺した。¹⁴彼らはイゼベルに使いを送って、ナボトが石で打ち殺されたと伝えた。¹⁵イゼベルはナボトが石で打ち殺されたと聞くと、アハブに言った。「イズレエルの人ナボトが、銀と引き換えにあなたに譲るのを拒んだあのぶどう畑を、直ちに自分のものにしてください。ナボトはもう生きていません。死んだのです。」¹⁶アハブはナボトが死んだと聞くと、直ちにイズレエルの人ナボトのぶどう畑を自分のものにしようと下って行った。

【使徒書日課】ガラテヤの信徒への手紙 1章1～10節

¹人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ、²ならびに、わたしと一緒にいる兄弟一同から、ガラテヤ地方の諸教

会へ。³わたしたちの父である神と、主イエス・キリストの恵みと平和が、あなたがたにあるように。⁴キリストは、わたしたちの神であり父である方の御心に従い、この悪の世からわたしたちを救い出そうとして、御自身をわたしたちの罪のために献げてくださったのです。⁵わたしたちの神であり父である方に世々限りなく栄光がありますように、アーメン。

⁶キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果てています。⁷ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなたがたを惑わし、キリストの福音を覆そうとしているにすぎないのです。⁸しかし、たとえわたしたち自身であれ、天使であれ、わたしたちがあなたがたに告げ知らせたものに反する福音を告げ知らせようとするならば、呪われるがよい。⁹わたしたちが前にも言っておいたように、今また、わたしは繰り返して言います。あなたがたが受けたものに反する福音を告げ知らせる者がいれば、呪われるがよい。¹⁰こんなことを言って、今わたしは人に取り入ろうとしているのでしょうか。それとも、神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、何とかして人の氣に入ろうとあくせくしているのでしょうか。もし、今なお人の氣に入ろうとしているなら、わたしはキリストの僕ではありません。

【福音書日課】マルコによる福音書 12章35～44節

³⁵イエスは神殿の境内で教えていたとき、こう言われた。「どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。³⁶ダビデ自身が聖霊を受けて言っている。

『主は、わたしの主にお告げになった。』

「わたしの右の座に着きなさい。」

わたしがあなたの敵を

あなたの足もとに屈服させるときまで」と。』

³⁷このようにダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」大勢の群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた。

³⁸イエスは教えの中でこう言われた。「律法学者に氣をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ることや、広場で挨拶されること、³⁹会堂では上席、宴会では上座に座ることを望み、⁴⁰また、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

⁴¹イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。⁴²ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランスを入れた。⁴³イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言うておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。⁴⁴皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

列王記上21章1～16節

¹これらの出来事の後のことである。イズレエル人ナボトは、イズレエルにぶどう畑を持っていたが、それはサマリアの王アハブの宮殿のそばにあった。²アハブはナボトに話をもちかけて言った。「お前のぶどう畑を譲ってほしい。私の王宮のすぐそばにあるので、菜園にしたいのだ。その代わり、お前にはもっと良いぶどう畑をやろう。もしよければ、それ相当の代価を銀で支払ってもよい。」³ナボトはアハブに言った。「先祖から受け継いだ地をあなたに譲ることなど、主は決してお許しになりません。」⁴アハブは、イズレエル人ナボトが、「先祖から受け継いだ地をあなたに譲ることなどでできません」と言ったことに機嫌を損ね、激しく怒って王宮に戻った。そして寝台に横たわった顔を背け、食事もしなかった。⁵すると妻のイゼベルが来て、「どうしてそのように機嫌を損ねて、食事もしないのですか」と尋ねると、⁶アハブは話した。「私はイズレエル人ナボトに次のように話をもちかけたのだ。『代金を支払うからぶどう畑を譲ってほしい。あるいはお前が望むなら、代わりのぶどう畑をやろう。』だがナボトは、『ぶどう畑は譲りません』と言うのだ。」⁷妻のイゼベルは王に言った。「今、イスラエルを王として治めているのはあなたではないですか。起きて食事をしてください。そうすれば気分はよくなるでしょう。イズレエル人ナボトのぶどう畑は、この私が手に入れてさしあげましょう。」

⁸イゼベルはアハブの名で手紙を書き、彼の印で封をし、その手紙をナボトが住む町の長老や貴族に送った。⁹手紙にはこう記されていた。「断食を布告し、ナボトを民のいちばん前に座らせなさい。¹⁰そして二人のならず者を彼に向き合せて座らせ、『お前は神と王を呪った』と証言させなさい。それからナボトを連れ出し、石で打ち殺しなさい。」¹¹町の人々、町に住む長老や貴族たちは、イゼベルが命じたとおり、すなわち彼女が手紙で書き送ったとおりに行った。¹²彼らは断食を布告し、ナボトを民のいちばん前に座らせた。¹³二人のならず者も来て、ナボトに向き合せて座った。ならず者の連中は民の前でナボトについて証言し、「ナボトは神と王を呪った」と言った。人々はナボトを町の外に連れ出し、石で打ち殺した。¹⁴人々はイゼベルに使いを送って、「ナボトは石で打ち殺されました」と伝えた。

¹⁵イゼベルは、ナボトが石で打ち殺されたことを聞くや、アハブに言った。「直ちにイズレエル人ナボトのぶどう畑を自分のものにしてください。ナボトはあなたにぶどう畑をお金で譲るのを拒みましたが、彼はもう生きていません。死んだのです。」¹⁶アハブはナボトが死んだと聞くや、直ちにイズレエル人ナボトのぶどう畑を自分のものにしようと下って行った。

ガラテヤの信徒への手紙1章1～10節

¹人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、この方を死者の中から復活させた父なる

神とによって使徒とされたパウロ、²ならびに、私と共にいるきょうだいの一同から、ガラテヤの諸教会へ。³私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平和があなたがたにありますように。⁴キリストは私たちの父なる神の御心に従って、今の悪の世から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身を献げてくださったのです。⁵この神に世々限りなく栄光がありますように、アーメン。

⁶キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に移って行こうとしていることに、私は驚いています。⁷ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人たちがあなたがたをかき乱し、キリストの福音をゆがめようとしているだけなのです。⁸しかし、私たちであれ、天使であれ、私たちがあなたがたに告げ知らせた福音に反することを告げ知らせるなら、その者は呪われるべきです。⁹私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。誰でもあれ、あなたがたが受け取った福音に反することをあなたがたに告げ知らせるなら、その者は呪われるべきです。

¹⁰今私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。それとも、神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし、今なお人の歓心を買おうとしているなら、私はキリストの僕ではありません。

マルコによる福音書 12章35～44節

³⁵イエスは神殿の境内で教えていたとき、こう言われた。「どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。³⁶ダビデ自身が聖霊を受けて、こう言っている。

『主は、私の主に言われた。』

『私の右に座れ』

私があなたの敵を

あなたの足台とするときまで。』」

³⁷このように、ダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」大勢の群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた。

³⁸イエスは教えの中でこう言われた。「律法学者に気をつけなさい。彼らは、正装して歩くことや、広場で挨拶されること、³⁹会堂では上席、宴会では上座に座ることを望んでいる。⁴⁰また、やもめの家を食物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

⁴¹イエスは献金箱の向かいに座り、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。⁴²そこへ一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランスを入れた。

⁴³イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、献金箱に入っている人の中で、誰よりもたくさん入れた。⁴⁴皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・9月6日「聖霊降臨節第16主日」の日課主題は「生涯のささげもの」。

・旧約日課は、「列王記上」から、「ナボトのぶどう畑」の出来事を物語る説話箇所。使徒書日課は、「ガラテヤの信徒への手紙」から、冒頭挨拶から本論導入に至る箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、神殿境内で主イエスが語られた律法学者批判を伝える語録箇所、および神殿で献金をささげる者に対する主イエスの視点を物語る説話箇所。

旧約日課(列王上 21 章より)

・「列王記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「前の預言者」の最終巻に位置づけられる歴史物語文書。上下巻に分けられているが、本来は一巻本であったと考えられている。「前の預言者」は、ヨシュアがモーセから引き継いだ民を約束の地カナンに導き入れた時代から始まり、士師の時代、王国時代を経て、バビロニアによる南王国滅亡によりカナン定住時代が終焉するまでの歴史を物語る「イスラエル正史物語」として編纂されている。本書(列王記)は、その最終巻として、ダビデ王から王国を継承したソロモン王の時代から、分裂した南北両王国が滅亡するまでの約400年を、両王国の王の年代記の様式で物語る。ただし、その中間部分には預言者エリヤおよびエリシャの物語が割り込んでおり、本書における「預言者」の位置づけは重要なものとなっている。

・日課箇所は、本書中間部の「預言者エリヤ」の物語が展開する間に置かれた、北王国アハブ王とイゼベル王妃にまつわる伝承説話で、「ナボトのぶどう畑」として知られる。日課箇所に続く後段には、この出来事を受けて預言者エリヤが王に対して裁きの預言を告げると王が後悔して断食したために赦されたという伝承説話が置かれている。また、本書下巻には、後にイエフによる王朝転覆が為された際に王妃イゼベルがエリヤの預言どおりに無残な死を迎えたと物語る伝承説話が置かれている(王下 9:30~37)。

・一連の伝承説話は、王妃イゼベルの邪悪性を際立たせると共に、それがアハブ王らのオムリ王朝の断絶をもたらす根源的な要因となったのだと語られている。

・イゼベルは、シドン王の王女としてオムリ王朝に迎えられ、アハブ王の王妃となった女性。本書は、この王の登場と同時に預言者エリヤを登場させ、バアル宗教をはじめとするイゼベルがフェニキアからもたらしたものに対する批判をさせている。

・オムリ王朝は、アハブの父オムリが前王朝時代に起こった謀反を司令官として鎮圧した結果、諸部族から王に推戴されて始まり、シドンなどフェニキア諸都市と結びつくことによって経済的・政治的基盤を形成していた。「オムリ」の名は、同時代のモアブ王の碑文やアッシリアの碑文にも見出される。

・「ナボトのぶどう畑」は、イズレエルの地にあったものとされている。同地は肥沃な平野で豊かな農産地として知られる。オムリ王は、サマリアの山林を地主から買い取って王都城塞を建設しているが、元々はイズレエル地方に拠点を持った家系だったのではないとも言われる。オムリ王朝は四代目ヨラム王の時代に司令官イエフの謀反により滅亡するが、その際、イエフはオムリ王家の王子らをはじめ王朝を支えた者をすべてイズレエルの地に集めて粛清したとされる(王下 10 章)。

使徒書日課(ガラテヤ 1 章より)

・「ガラテヤの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第4に置かれた書簡文書。冒頭2節に「ガラテヤ地方の諸教会へ」とあるように、ガラテヤ地方またはガラテヤ州の諸教会に宛てて記された書簡であるが、その地方については諸説ある。パウロは、シリア・アンティオキア教会から派遣されたバルナバ宣教団の一員として参画した宣教旅行で訪れたピシディア州やリカオニア州などの地方(使徒 13 章参照)に形成された教会共同体を知っており、これらの地方も広い意味でガラテヤ地方に相当する。他方で、本書中でパウロは自分が何らかの病等で療養を余儀なくされた際に彼らに宣教したと述べている箇所があり(4:13)、この事態を、パウロがバルナバ宣教団を離脱して独自の宣教団を組織して活動を始めた初期に「フリギア・ガラテヤ地方を通って行った」際に起こったとされる「イエスの霊がそれを許さなかった」という出来事と結びつけ、この時期に開拓した教会共同体に宛てた書簡と解することもできる。いずれにしても、本書簡中でパウロは、元々の宣教の師であったバルナバや使徒ペトロ(ケファ)に対して批判的な発言をしており(他の書簡ではほとんど見られない)、宛先教会にバルナバ宣教団の影響が及んでいることを念頭に置いているとも考えられる。バルナバや彼の後見人である使徒ペトロらは、比較的穏健でユダヤ教の伝統に広く理解を示す姿勢で教会形成を為していたと考えられるがそれに対して、割礼や食物規定などのユダヤ的伝統がキリストによって無条件に救いの共同体に加えられるという福音理解を妨げるものになっていると考えたパウロの目には、福音からの逸脱と映り、それをただす目的で本書が著されたと考えられる。

・「パウロ書簡」は、基本的に当時の書簡様式に則った冒頭部の挨拶を有するが、本書簡ではその様式が崩され、はじめから論争的な言説が組み込まれた挨拶となっている(1 節)。もっとも、『ローマの信徒への手紙』などは、論争的ではないが大きく拡大された挨拶文を冒頭に置いており、形式的に様式を採用するのではない自由な書式を用いることが特段に異例であるわけではない。

・「福音(エウアンゲリオン)」または「福音を告げ知らせる(エウアンゲリズー)」の用例は、1~2 章に集中している。

福音書日課(マルコ 12 章より)

・日課箇所は、「受難物語」の中で主イエスが神殿境内に滞在された際に語られた教えを伝える語録箇所、およびそれに続いて置かれた神殿で献金をささげる者たちに対する主イエスの視点を描く伝承説話箇所。前半箇所(35~40 節)は共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えているが、「マタイ」はこれを大きく拡大している。後半箇所(41~44 節)は、「ルカ」が「マルコ」と同様に伝えているが、「マタイ」は伝えていない。

・35~37 節は「ダビデの子に関する問答」として知られる。主イエスが「ダビデの子」と呼ばれたことは、「マタイ」や「ルカ」が積極的に取り上げている一方で、「マルコ」は控え目に言及している(10:47~48)。主イエスは実際に「ダビデ家」の血筋にある者と見られていたと考えられ、当時のヘロデ王家に批判的な者たちの中には「ダビデ王家」の王国を再興するための象徴的な存在になると考えていた者たちがあつたと推認される。このような政治的野望を託されることに対して、主イエスが否定的であつたことは疑いようがないが、それを拒否する言説として伝えられたのが、この箇所なのだろう。主イエスは、詩編 110:1 を引用して、ダビデが「メシア(キリスト)」を「主」と呼んでいるのであれば、「メシア(キリスト)」は「ダビデの子」ではない、という理屈を述べている。しかし、この言説は主イエスが「メシア」であることを前提としており、主イエス自身の発言として解するには困難が残る。

・41~44 節は「やもめの献金の逸話」として知られる伝承説話。ただし、主イエスは献金に訪れた人々の誰とも直接に接触せず、ただ観察者として献金者らを見て、その姿勢を論評したものとして描かれている。すなわち、対比させられている「大勢の金持ち」と「一人の貧しいやもめ」について、その属性を最低限描いてはいるが、それぞれの心象や内面をうかがわせる描写は一切ない。だれよりも少額の献金をした者のことを、「だれよりもたくさん入れた」と評されたことに、主イエスの献金(献身)理解を見ているのである。

来週の誕生日 (9 月 6 日~12 日)

。

主日礼拝の讃美歌から

・21-12「とうときわが神よ」(= I 16)は、17-18 世紀ドイツの敬虔派牧師クラッセルトの作詞。曲は、もともと別の歌詞につけられていたが、1704 年出版の敬虔派讃美歌集でクラッセルトの歌詞と組み合わせられ、以後、広く歌われるようになった。J.S.バッハは、クラッセルトの歌詞に自作の旋律をつけている。

・21-522「キリストにはかえられません」(= II 195)は、20 世紀に入ってから作られた後期福音唱歌の一つ。作詞者レア・ミラーについては不詳。作曲は、自由メソジスト教会牧師の家に生まれた音楽伝道者でビリー・グラハムと共に放送伝道や大衆伝道に従事した G・ビヴァリー・シェーの作曲。

・21-74「キリストの示す神を」は、チロル地方出身の現代カトリック宗教詩人トゥールマイルが新しく創作したエキュメニカル讃美歌。17 世紀ドイツを代表する讃美歌作家クリューガーの曲につけられている。

21-12「とうときわが神よ」**Dir, dir, o Höchster, will ich singen**

1. Dir, dir, o Höchster, will ich singen, / denn wo ist doch ein solcher Gott wie du? / Dir will ich meine Lieder bringen; / ach gib mir deines Geistes Kraft dazu, / daß ich es tu im Namen Jesu Christ, / so wie es dir durch ihn gefällig ist.
2. Zieh mich, o Vater, zu dem Sohne, / damit dein Sohn mich wieder zieh zu dir; / dein Geist in meinem Herzen wohne / und meine Sinne und Verstand regier, / daß ich den Frieden Gottes schmeck und fühl / und dir darob im Herzen sing und spiel.
3. Verleih mir, Höchster, solche Güte, / so wird gewiß mein Singen recht getan; / so klingt es schön in meinem Liede, / und ich bet dich im Geist und Wahrheit an; / so hebt dein Geist mein Herz zu dir empor, / daß ich dir Psalmen sing im höhern Chor.
4. Denn der kann mich bei dir vertreten / mit Seufzern, die ganz unaussprechlich sind; / der lehret mich recht gläubig beten, / gibt Zeugnis meinem Geist, daß ich dein Kind / und ein Miterbe Jesu Christi sei, / daher ich »Abba, lieber Vater!« schrei.
5. Was mich dein Geist selbst bitten lehret, / das ist nach deinem Willen eingerichtet / und wird gewiß von dir erhört, / weil es im Namen deines Sohns geschieht, / durch welchen ich dein Kind und Erbe bin / und nehme von dir Gnad um Gnade hin.
6. Wohl mir, daß ich dies Zeugnis habe! / Drum bin ich voller Trost und Freudigkeit / und weiß, daß alle gute Gabe, / die ich von dir verlanget jederzeit, / die gibst du und tust überschwenglich mehr, / als ich verstehe, bitte und begeh.
7. Wohl mir, ich bitt in Jesu Namen, / der mich zu deiner Rechten selbst vertritt, / in ihm ist alles Ja und Amen, / was ich von dir im Geist und Glauben bitt. / Wohl mir, Lob dir jetzt und in Ewigkeit, / daß du mir schenkest solche Seligkeit.

21-522「キリストにはかえられません」**I'd rather have Jesus**

1. I'd rather have Jesus than silver or gold; / I'd rather be His than have riches untold; / I'd rather have Jesus than houses or lands. / I'd rather be led by His nail pierced hand

[Chorus]

- Than to be the king of a vast domain / Or be held in sin's dread sway. / I'd rather have Jesus than anything / This world affords today.
2. I'd rather have Jesus than men's applause; / I'd rather be faithful to His dear cause; / I'd rather have Jesus than worldwide fame. / I'd rather be true to His holy name [Chorus]
 3. He's fairer than lilies of rarest bloom; / He's sweeter than honey from out the comb; / He's all that my hungering spirit needs. / I'd rather have Jesus and let Him lead [Chorus]

21-74「キリストの示す神」**Dank sei dir, Vater**

1. Dank sei dir, Vater, für das ewge Leben / Und für den Glauben, den du uns gegeben, / Daß wir in Jesus Christus dich erkennen / Und Vater nennen.
2. Jedes Geschöpf lebt von der Frucht der Erde; / Doch daß des Menschen Herz gesättigt werde, / Hast du vom Himmel Speise uns gegeben / Zum ewgen Leben.
3. Wir, die wir alle essen von dem Mahle / Und die wir trinken aus der heiligen Schale, / Sind Christi Leib, sind seines Leibes Glieder, / Schwestern und Brüder.
4. Aus vielen Körnern ist ein Brot geworden: / So führ auch uns, o Herr, aus allen Orten / Zu einer Kirche durch dein Wort zusammen / In Jesu Namen.
5. In einem Glauben laß uns dich erkennen, / In einer Liebe dich den Vater nennen, / Eins laß uns sein wie Beeren einer Traube, / Daß die Welt glaube.
6. Gedenke, Herr, die Kirche zu erlösen, / Sie zu befreien aus der Macht des Bösen, / Als Zeugen deiner Liebe uns zu senden / Und zu vollenden.